

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	23
紅玉集	25
2月号月評	26
総合誌の意	28
惠贈句集拝見	30
他誌転載	32
特別作品「すべてに感謝I」及び自註	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞 I	37
II	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌文歎	41
世の国父の蒼天 (11)	42
法隆寺時行記	44
奈良紀行 (3) 木枯し	46

今月の一句

野の梅に折れて径ゆく紙の里 桂樟蹊子

昭和四十六年作

今も漉いているのであろうが、滋賀県草津市の郊外の桐生に雁皮を漉く成子家があったようである。バスを降りてその家へ辿る暇の道は梅の木あたりで右へ折れると言う。訪れたいところの一つである。谷崎潤一郎の「吉野葛」に出てくる宇陀紙を漉く東吉野の福西家も、丁度そう言う斜面に居を構えている。

隆子

猪 一頭

塩路隆子

鴨千を掬はむとして北斗の柄
ゲルニカと枯るる蓮田を見たる鬱
百年の鯉閉ぢ込めて池凍る
黒鳥やわたし自由なをんなです
湯豆腐を崩し埒なき愚痴を吐く
分銅の台秤あり猪一頭
手負ひ傷ひと日舐めゐる狩の犬

二月号光耀抄

色紙絵の新巻一尾歳暮とす
色鉛筆百色欲しき聖夜かな
土大根いつも火のそば水のそば
三角波冬將軍の陣触れに
金色を持たぬ湖北の冬夕焼
柚子たわわ村に自慢の美人の湯
マイ箸のマップの浪速冬ぬくし
顔見世のはねて賑はふ甘党屋
年の夜鐘の音わたる雲井坂
鯛焼や子供に返りたくはなし
霧笛曳き深浦出づる北帰船
朝倉の栄えし城下山眠る
恋終り編みかけセーター解かるる
竹馬の足並み吾を抜き去りぬ
料亭の赤毛氈や雪明り

三川美代子
竹内悦子
松岡和子
北尾章郎
小澤菜美
鈴木照子
坂上香菜
田下宮子
小林成子
吉田希望
塩見育代
井口淳子
森下康子
阪本哲弘
笠井清佑

塩路 隆子選

木の実降る雑木林は秘密基地

「ハイジ」てふレストランにて蕪スープ

哲学書を枕の猫と日向ぼこ

おやぢさんの頑固が好きよおでん酒

白鳥の琵琶湖一周完歩証

寒紅をひき退院の顔作る

島唄に膝打つ酒場長き夜

新夫婦の神への誓ひ冬麗

落葉踏むオフィス街ゆくソクラテス

南座に十六夜の月春団治

コーチンの野に放たるる小六月

盲導犬銀杏散る道選びけり

山紅葉裾野ひたすら一輛車

錦秋を庭師袋に持ち帰る

蔦紅葉ブロック塀に高級感

電車待つ高架のホーム風寒し

毛糸編む夫の遺品の眼鏡かけ

柚子湯あと不老長寿の酒交す

橋渡る子連れの猿やしぐれ空
あおによし奈良には今日も冬の月

伊東 和子

前川 ユキ子

宮田 香

塩路 五郎

坂根 宏子

岡佳 代子

難波 篤直

西垣 順子

伊藤 憲子

山崎 里美

笹井 康夫

中川 すみ子

長濱 順子

中本 吉信

新実 貞子

西田 史郎

能勢 栄子

高谷 栄一

辻 知代子
常田 創

懐かしや火鉢の部屋に暖をとり

藪透けに嵯峨の家並や秋の暮

顔見世のまねき上るや藤十郎

「坊っちゃん列車」走る城下や冬うらら

大棟に在はす木霊や注連を張り

炉火囲む旅や遠野の物語

夫の手を借りねばならぬ年用意

一の橋に京の師走の幕上る

みちのくの思ひ出詰まるりんご箱

猪鍋や丹波の里の豊かなる

無縁仏落葉の衣を纏ひけり

抜きたての大根煮る香厨より

木の影に収まり小春去来塚

ほんのりと日向のぬくみ干蒲団

きりもみもひらりひらりも落葉かな

間遠なる寒柝やがて行き過ぎる

霜柱踏みて小人の国侵す

華やかなシヨール翼のごと纏ひ

谷戸住みに夜も降り止まぬ落葉音

冬霧のうすれゆくなかな番鳥

富田ヒナ江

清水侑久子

杉本 綾

片岡久美子

川崎 利子

紀川 和子

小西 和子

小林 久子

駒井 のぶ

青山 正英

粟倉 昌子

飯田美千子

五十嵐 勉

石川かおり

伊藤 洋子

伊庭 玲子

宇治 重郎

宇治原弥幸

大島みよし

大松 一枝

出撃の少年写真石路沁みる
 廊渡る僧の黒衣に散紅葉
 神有の佳き日水脈引く婚の舟
 地球儀を冬なき国へまはしけり
 こもりくの新酒に夫の上機嫌
 初晴を一直線に風の糸
 年詰まる町家を守り鍾馗像
 ぶぶ漬けの京都觀光秋盛り
 軒毎に嵯峨菊咲かせ大覚寺
 ふるさとの湖の匂ひや寒しじみ
 負けさうな介護のいたみ師走来ぬ
 丈六の弥陀へ障子の仄明り
 加賀ことばのすすめ上手や蕪鮓
 末枯れてオー・ヘンリーを読み返す
 たてしなにすこしあつたよ白いゆき
 いもうととサンタへおてがみかきました
 マラソンでおいぬかれてもがんばるぞ
 まるめたらハートのおもちできちゃった
 流星群青いしつぼが空走る
 せっかくのクリスマスまで学校へ

横田 矩子
 吉田 晴子
 和田森早苗
 安本 恵子
 山口キミコ
 山本 孝夫
 増田 一代
 松田 和子
 松田とよ子
 松田 洋子
 宮崎左智子
 秦 和子
 藤見佳楠子
 北條 清子
 森下ちとせ
 土井ほのか
 廣瀬まさや
 塩路 彩奈
 高野 綸
 廣瀬 結麻

琥珀集

聖夜

竹内悦子

色鉛筆百色欲しき聖夜かな
馳見た見ないの路地の騒ぎかな
へそ石にたまりし小銭冬うらら（六角堂）
六角堂に婚の願掛け黄葉季
神還り籤に当りし旅行券
冬ざれや喉飴常に持ち歩き
暮早し追はれるやうに客去れる

新巻一尾

三川美代子

抄らぬ整理整頓日の短か
試着室にあれこれ迷ひコート買ふ
駅までの落葉の道をハミングで
嚏にもいささか過敏ラッシュユ刻
色紙絵の新巻一尾歳暮とす
咆哮の干支の虎買ふ年の暮
友よりの訃報届けり小六月

寒月

松岡和子

土大根いつも火のそば水のそば
時雨るるを聴き給ひけり野の仏
ため息も欠伸もうつり日向ぼこ
新藁を入れてほどよき布草履
寒月を背負ひて伊賀へ峠越え
迷ひ断ち大白菜を真つ二つ
寒椿ひと日無言に過しけり

陣触れ

三代目の社旗の掲揚小春風
三角波冬將軍の陣触れに
電飾に木々金縛りクリスマス
見捨てぬは詩人ばかり枯蓮
手前味噌でふも世渡り爛熱き
仏像泥にいよよ冴ゆる眼四天王
冬紅葉明日は気圧の谷といふ

白鳥

小澤菜美

長旅の白鳥少し汚れ持ち
沸々とフランクメロディー銀杏散るフランク森
柿落葉のひとひら惜しみ塗の盆
時雨来て雨宿りせし庵軒
金色を持たぬ湖北の冬夕焼
女の座しかと鉄瓶湯気立てる
美濃よりの文を待ちをり雪螢

北尾 章郎

美人の湯

鈴木 照子

柚子たわわ村に自慢の美人の湯
露天湯を懐にして山眠る
大台の源流蒼く冬に入る
冬うらら自称歴女の龍馬論
なら町の聖樹に光るせんとくん
明治世の熱気ドラマや吹雪く夜(坂の上の雲)
ループトンネル出でて熊野の冬紅葉

浪速

坂上 香菜

黄落や春琴抄の道修町
ストリート奏の若者小六月
駅に立つ赤きポストや開戦忌
聖誕歌のスローリズムや和の茶房
マイ箸のマップの浪速冬ぬくし
初雪は地には届かず消えにけり
御堂筋をスケートボード街師走

蒔絵づくし

田下 宮子

鯛 焼

吉田 希望

教会に厩設へ聖夜待つ

顔見世のはねて賑はふ甘党屋

顔見世や父子の演じる恋模様

箒目に散る山茶花や高台寺

綿虫や蒔絵づくしのねね霊屋

京に来て母の納骨しぐれつつ

須弥壇の母の遺骨へ冬の燭

雲井坂

小林 成子

しぐれ虹

塩見 育代

堂寒し伎芸天女の指の反り

ジャズに酔ひ聖夜更けゆくホテルの灯

流鏑馬の子の頬赤しおんまつり

お旅所の焚火につどひはぐれ鹿

大禍を焚ける春日野大和舞

年の夜鐘の音わたる雲井坂

鹿寄せに高鳴るホルン淑気満ち

救急車行つたつきりの寒夜かな

標識の裏側雪の色したる

鯛焼や子供に返りたくはなし

頭蓋より重き本あり三島の忌

寒荒れの指現はるる爪切れば

安物の天ふらほどに着ぶくれし

凧が道路迷走して来たる

霧まとふ遭難の碑や波のこゑ

若狭富士の峰より消ゆるしぐれ虹

雁渡し灯台の裾波さわぐ

霧笛曳き深浦出づる北帰船

木枯の第一陣や部屋ごもり

一枚の錦絵となる山紅葉

磨かれし玻璃の陽頬に毛糸編む

甘南備ふもと

井口 淳子

竹 馬

阪本 哲弘

紅葉散る甘南備ふもと一休寺

小春日や御廟菊花の透し彫

肖像に自筆の賛や秋深き

石路明り探幽斎の障壁画

相伝の納豆ふふみ冬うらら

朝倉の栄えし城下山眠る(福井一乗谷朝倉氏遺跡)

石積に栄華のあとや年惜しみ

恋終り

森下康子

おん祭

笠井 清佑

カーナビにねぎらひ受けて雪の国

箸先に噛み跡残し年暮るる

自転車を斜め止め止めて暮早し

昼の陽を抱ける石に大寒波

束の間の冬の日差しやティータイム

恋終り編みかけセーター解かるる

荷解きはあなた任せや懐手

大吉の信疑のほどや神の留守

一号と呼ばれ夙勇み立つ

柿すだれ夕日の村を傾けて

角伐られ鹿驚愕の眼上ぐ

山眠る卑弥呼のロマンひしと抱き

品書は女将の書なり温め酒

竹馬の並足吾を抜き去りぬ

料亭の赤毛氈や雪明り

孟宗竹伸びて届くよ冬の雲

巫女被^{かづき}衣風に煽られおん祭

童子舞ふ東遊びやおん祭

番鴨浮見堂下を潜りけり

方形の大寺塔跡冬ひでり

聖夜唄聞きつ子供の深ねむり

小春日

伊東 和子

あてもなく

宮田 香

木の実降る雑木林は秘密基地

神の留守いづくに失せしイヤリング

山迫る湖東八風しぐれけり

榎の実の数珠くり数へ小町寺

大樟は里の誇りや神農祭

手を出せばすぐでる蛇口冬温し

小春日の道に親しく魚屋来る

蕪スープ

前川ユキ子

足 湯

塩路 五郎

訃報聴く車窓に雪の富士眩し

風抜ける冬の白樺並木道

しなやかな歓喜のうねり銀芒

「ハイジ」てふレストランにて蕪スープ

悠揚の冠雪の富士真っ向に

落葉松に透きたる冬の空真青

円錐の大景秋の八ヶ岳

寒菊の光求める強さかな

冬霧の流れて浮かぶ塔の朱

滔々と枯葉浮かべて疏水かな

電飾と黄落の街あてもなく

蟹を食ひいつしか正座崩れけり

ぐづる嬰の温もり背負ひ菜を洗ふ

哲学書を枕の猫と日向ぼこ

おやぢさんの頑固が好きよおでん酒

混浴の足湯に冬の紅葉かな

冬もみぢ薄茶一服名代茶屋

カンバスに落葉の描く貼絵かな

若草山をみてをり縁の日向ぼこ

リハビリの五体沈むる柚子湯かな

冬木の芽漢字ふえきし児の俳句

一月号月評

塩路 隆子

色紙絵の新巻一尾歳暮とす

三川美代子

二・三ヶ月前に「表面的に捉えないでもう少し深いところを見つめた句」を強要したばかりだったがこの句に作者の努力の跡が見られた。と言うよりもこの一句で躍進されたことに驚きを感じた。いい作品である。「本物の新巻をお届けしたいところですが悪しからず」と言う作者の声が聞こえて来そうな気がする。そのユーモアが通用するくらいの親しい相手であることも間違いない。恐らく一番良く描けた新巻が届けられたことであろう。佳い作品に逢えたものである。この句を忘れないで精進していただきたい。

色鉛筆百色欲しき聖夜かな

竹内 悦子

聖夜のきらびやかさを表現した句として評価をした。作者は聖夜の電飾に溢れた街を歩きながら、衝動的にこの光景を描きたいと思われた。これを描くためには「百色の色鉛筆」がどうしても必要、それ程に数多の色彩が街に溢れている。電飾の豪華さを「百色欲しき色鉛筆」と言う措辞で以って表現された技法に大拍手を贈りたい。折りしも今夜はクリスマス。誰かプ

レゼントして呉れる人はいないかな…。

土大根いつも火のそば水のそば

松岡 和子

句会に提出されたとき「どうして火のそばかが解らない」と評をしたところ「祖母がよく言っていました、大根は水分が多いから火の用心の為に何時も火の傍に置いています」と言うご本人よりも伊東和子さんの言葉にこの句が俄然光りを放つ感動を覚えた。古くからの言い伝えを知らなかったことを恥ずかしく即座に前言を取り消し、月評に取り上げることを約束した。佳き句である。筆者もそれに倣って大根は火の傍に置くことに決めた。

三角波冬將軍の陣触れに

北尾 章郎

風が強い日、波がぶつかり合って三角波が生じる。また岩壁や防波堤反射波が入射波と重なり合って出来る波を三角波という。どちらも風により波が高くなる冬に佳く見られる現象である。作者はそれを「冬將軍の陣触れ」であると表現された。「陣触れ」とぬ出陣命令である。この措辞が句を引き立てている。冬を報らせる三角波は正に冬將軍の陣触れであろう。日頃味のある句を作られる作者であるが、至宝の一句を加えられたことに賛辞を贈りたい。

以下略